

令和5年度
中学生平和大使派遣事業
(広島・沖縄)
報告書



大府市

事業の概要

- 1 目的 次世代を担う若者を「平和大使」として戦争により大きな被害を受けた国内都市に派遣し、戦跡・戦争関連施設の見学、戦争体験者や平和戦跡ガイドとの意見交換などを通して、戦争の悲惨さや平和の大切さを学び、同世代をはじめ、広く市民に伝えてもらうことを目的とする。
- 2 期 日 ①広島派遣
令和5年7月27日（木）・28日（金） 1泊2日
②沖縄派遣
令和5年8月23日（水）～25日（金） 2泊3日
- 3 派遣人数 ①②各8人
事務局として以下の職員が随行
①地域福祉課職員2人、企画広報課職員1人
②地域福祉課職員2人、学校教育課職員・企画広報課職員各1人
- 4 選出方法 広報おおぶ等で募集し、選考会において選出
- 5 対象学年 第2学年
- 6 報告書 平和祈念戦没者追悼式参加者へ配布するほか、市図書館及び中学校図書室へ設置。市公式ウェブサイトへ掲載

日 程

【委嘱状交付式・事前勉強会】 令和5年6月17日（土）

時間 午前9時30分から午後1時まで

場所 市役所2階201会議室、大倉公園

内容 市長あいさつ、委嘱状交付、自己紹介、事業説明、

事前勉強会（①大府市遺族会員等による戦争体験講話、②椋山女学園大学水野英雄ゼミ学生による沖縄現地調査報告、③平和関連施設見学（被爆樹木二世アオギリ、平和都市宣言記念碑、大倉公園防空壕）

【広島派遣】 令和5年7月27日（木）・28日（金）

（1日目）

8：10 市役所集合

9：10 名古屋駅発

11：27 広島駅到着

13：20 袋町小学校平和資料館見学

14：00 広島平和記念資料館見学

16：00 被爆体験講話聴講

17：15 旅館到着

（2日目）

9：00 旅館出発

9：15 平和記念公園見学（ピースパークツアー）

13：00 ピースディスカッション

14：00 おりづるタワー見学

16：03 広島駅発

18：19 名古屋駅着

19：00 市役所到着 解散

【沖縄派遣】 令和5年8月23日（水）～25日（金）

（1日目）

- 6：30 市役所集合
- 7：10 セントレア到着
- 8：30 セントレア出発 [JTA045 便]
- 10：40 那覇空港到着
- 13：00 ひめゆり平和祈念資料館見学
- 14：00 沖縄県平和祈念資料館見学
- 17：00 ホテル到着

（2日目）

- 9：00 ホテル出発
- 9：10 チビチリガマ見学
- 10：00 シムクガマ見学
- 11：00 座喜味城跡見学
- 11：30 ユンタンザミュージアム見学
- 13：20 平和講話及び平和ディスカッション（読谷村文化センター）
- 15：30 入村式（読谷村役場）
- 16：00 男女別に分かれ、各民家で夕食（沖縄料理）づくり→宿泊

（3日目）

- 8：15 離村式
- 9：20 体験王国むら咲むら見学
- 14：00 那覇空港到着
- 16：05 那覇空港出発 [JTA044 便]
- 18：15 セントレア到着
- 19：20 市役所到着 解散

【派遣報告会】 令和5年9月17日（日）

時間 午後2時から

場所 市役所2階202～204会議室

【平和祈念戦没者追悼式】 令和5年10月1日（日）

「平和に向けたメッセージ」を发表

時間 午前10時から

場所 市役所地下多目的ホール

「平和大使」の紹介

【広島派遣】



井上 和花南



西川 実寿



藤田 実和



木村 晴美



清水 美来



西 勇樹



渡邊 颯



大須賀 涼音

【沖縄派遣】



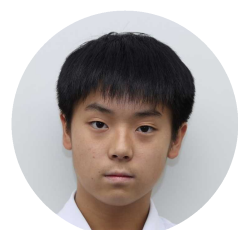
加古 蒼大



高山 瑛



加藤 さくら



久納 一平



金納 知咲



佐藤 和咲



鈴置 晋平



関戸 美舟

(順不同、敬称略)

「平和大使」感想文

(平和大使の想いを尊重し、原文を掲載していますが、一部修正しています。)

広島派遣

2023.7.27 (木)・28 (金)

平和をつなぐ笑顔の花

大府中学校 井上 和花南

可哀想じゃダメ。広島で過去に起きたことは可哀想で済ませてはいけないと思います。広島で被害にあった人は数え切れず、経験していない私には想像も出来ませんが、可哀想という感想だけで済ませてはいけないと思います。原子爆弾が投下された1945年8月6日月曜日。投下された原子爆弾は広島全体の姿を一気に変えました。そして人々の平和を奪いました。今は平和を取り戻した広島のいたるところに、平和を祈る折り鶴がありました。これを見て、私が当たり前だと思っていた平和が、一度平和を奪われた広島の人々にとっては当たり前ではないのだと感じました。

私は、この平和を守っていくために、「平和のバトン」を繋いでいきたいです。繋いでいくために私は自分なりの平和を広めていきたいです。私は、平和とは人々が皆幸せであることだと思います。みんなが幸せでいることが平和に繋がっていく。幸せだから笑顔が生まれる。笑顔でいれば幸せが訪れる。しかし、一人の笑顔でたくさんの人の幸せをつかむことはできません。まずはその幸せを「笑顔の花」で表して、身近な人へ贈っていくことが私にできることです。それがどんどん広がって、この平和が守られるといいなと思います。

これが私の考える平和×笑顔の花です。このように一人ひとりが自分なりに思う幸せ＝平和を広めていくことが、私たちにできることだと思います。しかし、今でも争いをしている国はあります。自分には関係がないからと目を背けるのではなく、世界のこと、過去に起き

たことをまずは知ることが大事だと思います。

私は、平和を願う気持ち、幸せな気持ちを「笑顔の花」として周りに伝えていくことで、平和の実現のための第一歩を踏み出したいと思っています。



原爆供養塔（平和記念公園）



ピースパークツアー後に意見交換を行う平和大使

広島で考え、知った平和への思い

大府中学校 西川 実寿

7月の終り、平和大使として広島に向かいました。平和を知り、それを「平和のバトン」として、つないでいく。その思いを持って行った広島で、「平和」に触れ、考え、話し合うことができました。

広島には、平和記念公園を中心として、戦争や原爆に関するものが多くあります。それらをめぐり、展示物などを見る中で、平和をつないでいかなければならない理由を自分の中で改めて持つことができました。それは、戦争によって生まれた悲しみの傷に苦しむ人、苦しみ続ける人を二度と生まないことだと思います。そのために、過去を知り、今を見つめ、出来ることを行い、未来のために動く。それを率先して行うことが平和大使に求められているのだと思います。

2日目の平和ディスカッションでは、「平和×○○」をテーマとして、平和を実現するためには何を重視すべきか、自分の考えた言葉を入れ、それを共有する活動を行いました。具体的には、自分の持つ価値観と自分の思う「平和」のイメージをもとに、平和のための行動「マイアクション」を考え、グループで意見交換を行うものです。この活動により、自分が「マイアクション」として実践していくことを明確にすることができました。

戦争は、すれ違いやぶつかり合いから起こること、それならまずは相手の意見を尊重し、その上で自分の思いを伝え、話し合いをしていく。普段の生活からそれを実践していこうと思います。また、平和のバトンをつなぐためには自分が見聞きしたことを正しく伝えることも大

切です。現地に行ったからこそ言える、かつての戦争のことを悲しみや悲惨さも含めて、相手の心へとしっかり伝えることをしていきたいと思います。言葉に心を込め、相手の心に訴えかけ、「平和のバトン」をしっかりとつないでいきます。



ガイドの説明を受ける平和大使（平和記念公園）



ピースディスカッションの様子（おりづるタワー）

繋ぐ

大府中学校 藤田 実和

「これは生きていた証」広島平和記念資料館で私と同年代の子供たちが使っていたお弁当箱の遺品を見て、今の私たちと変わらない日常を送っていたのにも関わらず、原爆によってそれが一瞬で崩れてしまったことに衝撃を受けました。もうこんなことを起こしてはいけません。平和な世界をつくるために私にできることを考えました。

広島では、たった一発の原子爆弾によってたくさんの尊い命が奪われました。そして、たくさんの人たちの人生も狂わせました。今の私たちでは考えられないような出来事にショックを受けました。被爆者は語りました「もう誰にもこんな思いをさせたくない」と。原子爆弾というものは本当に恐ろしいものだと感じました。

私が考える平和な世界は、互いに認め合い、理解し合うことができる世界だと思います。例えば、学校での話合いで意見が分かれてしまったとき、自分の意見を押しつけるのではなく、時間をかけてたくさん話し合うことで相手のことを理解し、自分のことを理解してもらう。そうやって積極的に相手と関わることで、それぞれの価値観を認め合い、話合いを通してお互いが折り合える関係性を築くことが平和な世界へとつながると思います。

平和とは程遠い行動かもしれませんが、一人ひとりの小さな心構えや行動で、世界は変わると 생각합니다。私は、平和への一歩として、広島で学んだことを今日から実行していきます。そして、広島で学ん

だことを積極的に伝えることで、平和について考えてくれる仲間をたくさん作りたいです。



ガイドの説明を受ける平和大使（平和記念公園）



ピースディスカッションの様子（おりづるタワー）

平和への思い

大府西中学校 木村 晴美

平和とは、どういうことか。私は広島派遣に行く前からずっと世界が平和になるというのはどういうことなのか、そのためにはどのようなことをすればいいのかを考えていました。

派遣1日目は、広島平和記念資料館に行きました。そこには、爆心地の近くにいた中学1年生が着ていた制服が展示されていました。その制服はとても小さく、中学1年生のものとは思えないほどでした。私はこの制服を見て、私と同じぐらいの年の子どもが一発の原子爆弾で人生を奪われてしまった事実胸が苦しくなりました。

派遣2日目の最後に、みんなで平和について話し合いをし、それぞれが持つ平和のイメージを発表しました。私の平和のイメージは「協力」、「助け合い」、「愛」などでしたが、みんながそれぞれちがうイメージを持っていました。その後、「平和×○○」をテーマとして、平和のイメージをもとに、平和のために自分ができることを話し合いました。私は、「平和×挑戦×愛」にしました。挑戦を選んだのは一人ひとりが「戦争をやめよう」と挑戦して言っていけば平和に近づけると思ったからです。愛を選んだのは相手のことを思いながら接すると平和になると思ったからです。決め終わるとみんなで意見を共有しましたが、これも私の思っていることとちがい、平和への思いや考えは人それぞれだということ学びました。

私は、広島派遣を通して、戦争がどんなに辛くて苦しいか、広島の人々がどんな思いだったか、平和がどれだけ大切かを知りました。そ

して、平和のために私たちにもできることがあることが分かりました。そのことを学校だけではなく、他の人たちにも伝えていきたいです。残念ながら、被爆体験者の方がどんどんいなくなってきています。私が代わりに次の世代の人達に平和の大切さをしっかりと伝えていきたいです。



説明映像を視聴する平和大使（袋町小学校平和資料館）



爆心地となった建物横にある説明板を読む平和大使

私が考える平和とは

大府北中学校 清水 美来

私は平和大使として広島を訪問しました。行きの新幹線で、「平和とはどういうことか」と質問が投げかけられ、「なくてはならないもの」と答えました。

広島で特に印象に残っているのは原爆ドームです。木々に囲まれ、戦後から78年という時が経っていることを感じさせない、堂々とその場にそびえ立つ姿を見た時、言葉には言い表せられないような衝撃を覚えました。「戦争」というものが本当にこの地で起きたんだと、身に染みて感じました。この過ちは絶対に繰り返してはいけないと思うと同時に、そのためには、まずは一人ひとりが戦争と平和に対して、関心を持つことが必要だと思いました。

広島派遣の前、私は平和に対してどこか客観的な姿勢をもっていました。ですが、平和を祈る様々な方と交流し、私の中に変化が生まれました。平和な社会を実現するためには、実際に「見て、体験し、感じ、考える」ことが大切だということです。私は、原爆が投下された地を実際に自分の目で見て体感したことで、より具体的で明確な出来事として捉えることができるようになりました。私たちのような若い世代が工夫し、協力して平和の大切さを伝えていかななくてはならないと思います。何よりも重要なのは、戦争がもたらした悲惨な現実を多くの人に伝え、何十年も何百年先も平和を守り続けていくことだと思います。

最後に帰りの新幹線で、行きと同じ質問に「私たちが、守ってい

なくてはならないもの」と力強く答えることができました。この2日間で実感したことは、戦争とは、無意味で誰一人の幸せも呼ばず、永遠に悲しみや苦しみが続くものということです。今回の貴重な体験を身近な人に伝えていくだけでなく、募金をしたり、SNS等を使って情報を発信したり、一つずつ小さなことから、永久に続く平和の実現に向けて取り組んでいきたいです。



ガイドに質問する平和大使（平和記念公園）



ピースディスカッションの様子（おりづるタワー）

踏み出した平和への一步

大府北中学校 西 勇樹

僕は小さいころから祖父母に戦争についての話を聞いていて、戦争がいかに人々の人生を打ち砕く悪いものかを実際に確かめたいと思い、平和大使に応募しました。

広島平和記念資料館で僕は息を呑みました。原爆投下直後の人達の様子を表した絵、ぐにゃぐにゃになった自転車、血のべっとり付いた服、熱線を浴びた人影の石。これが本当に現実にあったのかと目を疑う程でした。他には顔が分からない程に大火傷をしている人。死の斑点が顔中に出ている人。原爆が落とされたその瞬間から地獄絵図の様な世界に変わり、当たり前前の生活が壊され、亡くなった一人ひとりに夢や希望があったのにそれを一瞬で奪った。どれほど無念だったでしょう。そして、伝承者の方からも話を聞きました。原爆が投下され、沢山の方が亡くなり、生き延びた人達も原爆症で苦しみました。原爆を近くで受けた為に原爆症になったのではないかと不安で髪の毛が抜けていないかを確認めたり、肌がケロイドになり差別されたくないが為に年がら年中長袖を着ていたり不安な気持ちを抱えながら日々を過ごしていたそうです。

このように原爆は人々の心と体に深い傷を残しました。僕はこんな辛い思いはしたくないし、誰にもさせたくない。僕は強くそう思います。これまでは、「今じゃあり得ない」「自分が生まれる何十年も前の話だ」とあまり実感がなく、漠然と戦争は良くないというイメージでした。しかし、今回平和大使として広島を訪れ、現地で説明や伝承

者の方の話を聞いて、広島で起きた出来事を肌で感じ、たった一発の原子爆弾が無差別に多くの命を奪い、生き残った人々の人生も変えました。そんな戦争が憎らしく思えます。

今、当時を生き抜き頑張ってきた人達がいる、僕達は平和に過ごせています。しかし、核兵器で他国を威嚇する国や国家間の紛争など平和ではない一面もあるのが現実です。広島で起きた辛い出来事を思うと絶対に止めなくてはならないのです。平和な世界の実現のために僕達ができる事。それは全世界へ「人々の笑顔、夢、希望が身勝手に奪われないようにする為に絶対に戦争をしてはいけない」と発信する事。だから、その強い思いを持って僕は多くの人に伝えたい。この原爆の恐ろしさを。



NHK広島放送局のインタビューを受ける様子

原爆ドーム前を歩く平和大使



平和とは何か

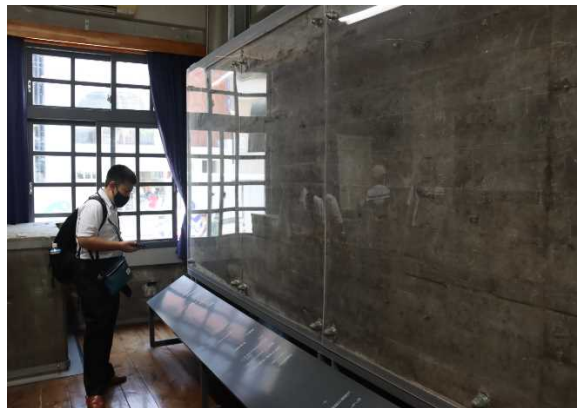
大府北中学校 渡邊 颯

僕は、広島派遣を通して、「平和」について考えていくうちに、今の僕達の生活のありがたさを深く実感するとともに、「平和」とは何か、「平和」のために何ができるかを考えました。

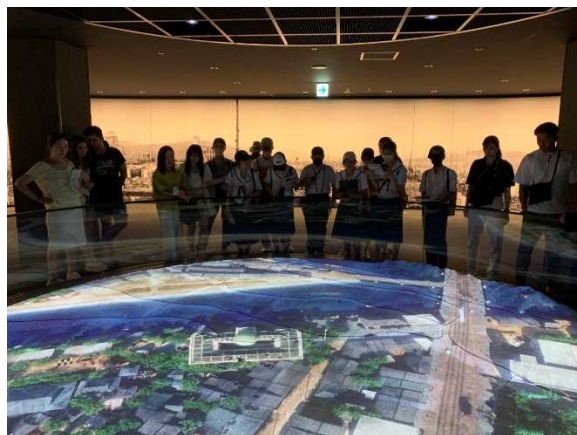
最初に訪れた袋町小学校平和資料館では、炭化した木れんがの残る壁や爆風で吹き飛ばされた太鼓などの被爆した物品が並んでいて、どれもが原爆の威力を物語っていました。その中でも、印象深いのは壁の裏側に被爆当時に書かれた伝言です。伝言は教え子や家族を探したり、自身の安否を伝えるために書かれた物で、被爆直後の状況がとてもしリアルに伝わってきました。僕は、「なぜこんなに多くの子供達が死ななきゃいけなかったのだろう。」と思いました。どんな理由があっても、人を殺す理由にはならないし、人の未来を奪う権利なんて誰にもないはずです。この事を、世界中の人達に理解してもらえるように、原爆がもたらす悲惨な結果を、まずは身近な人達に発信していこうと思います。

次に訪れた広島平和記念資料館では、原爆投下直後の広島の実況映像を見ました。ピカッと光ったと思ったら、ドンという爆音とともに広島が一瞬で火の海になった映像を見て、「自分の町でも、同じことが起こったら・・・」と思うと怖かったし、被爆者の方が言っていた「一瞬で全て奪われた」という言葉の意味がよく分かりました。展示品の中では、熱線によってケロイドを負った人の写真が印象に残っています。ケロイドが痛くてかゆくて眠れないし、周りの視線

や心無い言葉をかけられるなど心も体もボロボロでつらかったそうです。しかし、それでも「生きよう」とする人達に僕は感動しました。広島派遣を通して、「平和」とは「つくる」ものだと思います。平和である事は当たり前ではありません。平和を「つくる」ためにその事をみんなに広めて、平和の「尊さ」をみんなに理解してもらいたいです。「げんこつに、げんこつで返してはいけない。」これは、被爆者である國重^{くにしげ}さんの言葉です。この言葉には、武力には武力を、ではなく言葉で武力を抑え、戦争を二度と起こさせないようにしよう、という國重さんの思いが詰まっています。僕はこれから、派遣で学んだ事を伝えていく事で、平和を目指す一人として行動していきます。



被爆時に伝言が書かれた壁（袋町小学校平和資料館）



原爆投下直後の再現映像を視聴する平和大使
（広島平和記念資料館）

平和のために出来ること

大府南中学校 大須賀 涼音

私は、今回の広島派遣で平和の大切さ、平和のために私達でも出来ることがあるということを実感しました。

私がそれを実感したのは一日目の被爆体験講話がきっかけです。被爆体験講話では、被爆体験伝承者の方が交流のあった被爆者の方についてのお話を聞かせてくださいました。その被爆者の方は、原子爆弾が落とされたとき、今の私たちと同じくらいの年齢だったそうです。私はこの事実を聞き、とても驚き、色々なことを考えさせられました。私達と同じくらいの年齢で戦争や親しい人との別れを経験するなんて私には想像できませんでした。

当時、世界規模で戦争が起きてしまい、世界中が平和といえる状態ではありませんでした。だから、今、ロシアとウクライナでは問題が起こってしまっていますが、日本では平和といえる状態にあることは当たり前的事ではなく、すばらしいことなんだと改めて思いました。

私は、広島に行く前から平和のために何ができるのかという事を考えていました。私に何かできることはないのか、中学生という立場でできることなんてあるのだろうか。被爆体験講話のときに被爆体験伝承者の方に聞いてみると、中学生でもできる平和のための活動があるということが分かりました。例えば、戦争や原爆が落とされた当時から残る建造物の保存への募金に協力したり、今回のような実際に戦争を体験した人の話や自分で調べて得た知識を身近な人に伝

えることです。

平和は一人ひとりが意識して行動することが何よりも重要だと感じたので、私も今回学んだことを積極的に行って、積み重ねていけたらいいなと思います。また、被爆体験伝承者という活動をしている人は全国にたくさんいるので、私ももう少し大きくなったらそのような規模の大きい活動もして、平和のための力になりたいです。



被爆体験講話

(国立広島原爆死没者追悼平和祈念館)

韓国人原爆犠牲者慰霊碑 (平和記念公園)



沖縄派遣

2023.8.23(水)～25(金)

「平和」への道を歩む

大府中学校 加古 蒼大

「水、水をくれ…。」とうめく患者たちの声。くちゅくちゅと洞窟の中に響き渡るウジのわく音。これは実際に戦時中、僕達と同じくらいの年齢のひめゆり学徒隊の方々が沖縄陸軍病院で体験した地獄のような環境です。

僕はこの話を知ったとき、何といったらいいかもわからず、ただ心がぎゅっと握られたように苦しく感じました。それまで僕は「戦争」というのは国と国との争いであって、空襲や爆弾によって、傷つけ合う戦いだと思っていました。しかし、今回の沖縄派遣を通して、予想以上に痛ましいものだ気がつきました。確かに戦争は兵器によって人の身体を傷つけます。でも、傷つけるのは身体だけではありませんでした。人の心をもボロボロにしてしまうのです。心に負った傷は一生癒えることはありません。関係のない人々に否応なしに傷をつける「戦争」はあってはならないことです。この思いは派遣前も派遣後も変わりはありません。そしてこの沖縄派遣を通して「平和」への道を感じました。沖縄の方々は皆さんとても明るく気さくな人でした。そんな平和な日々を実現するためには、広く多様な視野を持つことが大切だと思いました。自分の立場から見た視野だけでは見えない部分を他の人の立場になって一度見つめ直してみることで、新しい考え方が生まれてくると思います。これはどんなことにも言えて、小さな喧嘩から、国と国との戦争にも通ずるものがあると思います。自国の利益しか考えないようにしていれば平和はいつまでも見えて

きません。相手と手を取り合って歩いてゆける道を見出すことができれば、世界は笑顔に満ちあふれた、まさに「平和」な世になっていくと思います。その道を歩いていくために、これから、今回派遣で学んだ「平和」を胸に、笑顔を咲かせていきたいと思っています。



ひめゆりの塔と全国から届く千羽鶴



平和ディスカッションの様子（読谷村文化センター）

未だに残る沖縄の戦争

大府中学校 高山 瑛

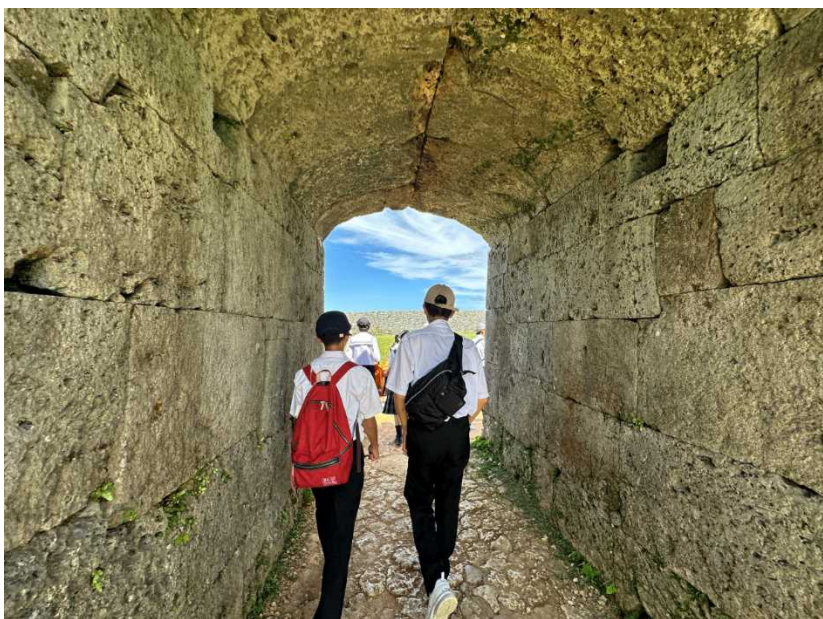
私は、平和大使として沖縄へ行きました。私には今回の派遣事業を通じて、とても深く印象に残ったことがあります。それは、戦争当時沖縄で行われていた教育についてです。戦争中は敵国の捕虜になることは恥とされていて、アメリカ兵に捕まってしまうとはずかしめを受けてから殺されるので、捕虜になるくらいなら自決をした方がまだ良いと教え込まれていたそうです。ですが、実際にはアメリカ軍の捕虜は食べ物や服の支給が行われて、殺されることはありませんでした。この話を聞いて、自分たちの味方であるはずの日本軍の言うことに従えば死んでしまい、敵であるはずのアメリカ軍に従えば生きられるという状況だったと知り、戦争は何を信じれば良いか分からないとても怖くて恐ろしいものだったのだと思いました。

これまで私は、戦争は終わり、もう解決したと思っていました。ですが、現在沖縄県には 1,900 トンもの不発弾がまだ残っていて、工事をする際には金属探知機を使って、地中に不発弾があるかどうかを調べているとおっしゃっていました。全ての不発弾を撤去するまでには、あと 80 年ほどかかるそうです。それに加えて、今回私たちが訪れた読谷村では、戦後で 95%、現在でも 30%ほどの土地が米軍基地になっています。その影響で、派遣中にも基地からの騒音が聞こえてきました。このようなことから、戦争は終わったけれど、まだまだ問題は多くあるので、完全に解決して平和になったと言い切ってしまうことは難しいのではと思います。

私は、これから戦争について何も知らない人や身の回りにいる家族・友達に対して自分がこの事業の中で知ったこと、そしてそれを学んだことによって出てきた自分の考えや思いなどを伝えていこうと思っています。



今も見つかる不発弾について説明を受ける平和大使



アーチ型の石門をくぐる平和大使（座喜味城跡）

平和のためにできること

大府西中学校 加藤 さくら

私は今、日本は平和だと思います。不平等なことはまだまだあるけど、誰もが戦争はダメなことだと知っていて、命の危険はなく自由です。私はそれが当たり前だと思っていましたが、世界各地では、今も戦争や紛争に苦しんでいる人たちがいます。平和は当たり前のことではないのです。

日本も、ほんの78年前まで戦争をしていました。沖縄でも学生が働かされたり、米軍から隠れて真っ暗なガマに避難したり、方言が禁止になったりしました。

現在も、沖縄には不発弾が1,900トンも残っていて、全て取り除くには80年以上かかるそうです。不発弾の現物は想像以上に大きく、こんなものが地下に埋まっているとは恐ろしかったです。そして、沖縄には日本全体の米軍基地の70%があります。戦争は勝った負けたで終わりではないのです。

また、チビチリガマとシムクガマを訪れました。どちらのガマも、自然に囲まれたところにあり、昔そこでたくさんの方が生活していたとは想像もつきませんでした。チビチリガマでは多くの方が自決で亡くなったそうです。私はすごく胸が苦しくなりました。逆に、シムクガマでは誰も自決していません。それは、シムクガマにいた比嘉平治さんと平三さんがハワイからの帰国者で、捕まってもアメリカ兵には殺されないといほかの人たちを説得したからだそうです。私は、人生は紙一重、そして正しい教育はとても大事だと思いました。

私は沖縄に行って、平和のありがたみや戦争の恐ろしさについて学びました。普段はあまり考えない平和について深く考えさせられた3日間でした。中でも、私はガイドの方の「戦争には色がある、匂いがある、味がある」という言葉が忘れられません。現地に行くことでその言葉が肌で実感できました。そして私は、平和のために自分ができることは何かと考えました。私は今回学んだことを身近な人に伝えたり、新聞を読んだりしてもっと世の中のことを知りたいと思いました。また、思いやりの心を持ち、自分の命も人の命も大切に生きていきたいと思います。そして、世界から戦争がなくなってほしいと強く願います。



生存者の体験記を読む平和大使（ひめゆり平和祈念資料館）



ガマの奥で当時の避難住民の様子を想像する平和大使（シムクガマ）

本当の平和とは

大府西中学校 久納 一平

私は平和大使として沖縄に派遣されて多くのことを学んできました。今までは平和が良い、戦争は良くない、というだけの考え方で平和について理解した気になっていました。しかし、その考えだけではどうしても浅く甘いものだと感じました。それはなぜか考えると、戦争について深く知る事ができる機会が少ないからだと考えました。例えば、チビチリガマやシムクガマでは、実際起こった出来事その場で直接話を聞くことで当時の様子を感じることができました。今の時代、インターネットなどを使えば何でも知ることができかもしれませんが、実際にその場に行き、現地の人話を聞き、資料などを見ることでやっと戦争の生々しさや実際にあった現実を理解することができると深く思いました。今でも続いている戦争、紛争はありますが、そうでない地域では命の危険が伴う戦いはどこか遠いものだと思ってしまうのかもしれませんが。それゆえに平和について深く考えることや戦争の苦しさ、悲惨さ、そういったものに目を向けにくいのだと思います。そして改めて思いました。「平和とは何なのか」。私自身は、笑顔で過ごしていられることが平和だと思いますが、家族と過ごしていたい、友達と遊んでいたい、単純に戦争がない世界がいいなど、平和にはどんな形があってもいいんじゃないかと考えます。もちろんその平和を守るために広い視野を持ったり、良きリーダーになったりしていく必要があります。起こってからでは遅く、起こる前にできることはたくさんあるのだから、それぞれが自

分の思う平和のために、今、どんなことをしていくかが大切だと思います。

私は、今回学んだことを「戦争について」「平和について」あまり深く考えた事がない人に伝え、それぞれの平和を考えるきっかけにしてもらいたいと思いました。



沖縄戦犠牲者の氏名が刻まれた「平和の礎」を見つめる平和大使
(平和祈念公園)



亡くなった方の冥福を祈る平和大使（チビチリガマ）

平和は当たり前ではない

大府北中学校 金納 知咲

私たちが今出来ること、これからすべきことは何だろう、と深く考えた2泊3日の沖縄派遣でした。私は、沖縄で戦争の与える影響や恐ろしさを体感し、平和は決して当たり前のことではないと改めて気付きました。

チビチリガマでは捕まるくらいなら殺してくれといい、シムクガマでは米軍は怖くないから外へ出ようと言ったそうです。日本兵は捕虜たちを裸にさせて殺していたため、米軍にもそうされるに違いないと思い、それなら自決するほうがマシ、と集団自決をしたチビチリガマ。沖縄に来る前ハワイにいて、米軍は住民の安全を守るという正しい情報を知っていた比嘉さんという人が皆に呼びかけたお陰で助かったシムクガマ。みんなが不安になり、どうすればいいのかというときに、最初の1人の決断は大きいです。リーダーの重要性を学ぶとともに、私も比嘉さんのように正しい情報を伝えるリーダーになりたいと思いました。

私達がガマの中で皆が持っていた懐中電灯を消したとき、灯りもない、明日がくるかも分からない、そんな当時の人達が感じていたであろう恐怖が伝わってきました。平和講話でガイドの方から「戦争には、におい・味・色がある」と教えてもらいました。現地に行ったからこそ感じられたものだったと実感しました。

しかし、戦争が終わり78年がたった今も不発弾が見つかっていて、

完全に処理するには約 80 年はかかると言われています。戦争を始めるのも、後の処理をするのも人間です。戦争は長い間様々な人を苦しめます。沖縄では本当の意味での戦争は終わっていないのです。

今後私は、現地の方に教えてもらったこと、感じたことを正確に周りに伝えていきたいです。そして、これからの生活で 1 日 1 日の幸せを噛み締めていきたいです。



ひめゆりの生徒たちが働いた沖縄陸軍病院を再現した壕を見る平和大使
(ひめゆり平和祈念資料館)



比嘉氏の功績を称える石碑の前で説明を受ける平和大使 (シムクガマ)

未来へ繋げる平和のバトン

大府南中学校 佐藤 和咲

私は、今回の沖縄派遣で戦争の悲惨さや苦しみを学びました。

1日目の資料館では、当時の状況や人々の思いが展示されていました。写真や絵を見て、当時の方の苦しい表情が印象に残っています。

2日目のチビチリガマとシムクガマでは、実際にその場に行き、目で見て体感しました。チビチリガマでは自決して亡くなった人の骨があるため、中に入ることはできなかったけれど、シムクガマでは助かった人が大勢いて、自決した人は誰一人いなかったため、中に入ることができました。中に入ってみると、午前中なのに想像以上に真っ暗で、懐中電灯があっても前が見えづらい状況でした。水も流れていて、でこぼこした岩の上を渡って奥へ進みました。このような過酷な環境で暮らすということはどれだけ大変なことかを知ることができました。食料等を運ぶために何回も出入りすることを考えると、今の私には絶対にできないことだと思いました。

世界に目を向ければ、価値観の違い、資源の奪い合いなどで戦争がなくなったことはありません。しかし、戦争では何も解決しないどころか失うばかりであると思いました。

一人ひとりが沖縄の歴史に向き合い、決して風化させることなく、戦争が引き起こす狂気と平和のありがたさを真剣に考えることができれば戦争はなくなるはずです。私たちの世代が広めていくべきだと思いました。まずは、学校の友達や家族と戦争について話すことなどから一つずつ始めていき、より多くの人とこの3日間で感じたこ

とを共有したいです。

二度と戦争を起こさない世界をつくること、平和のバトンを繋げていく責任は私達自身にあることを、身をもって感じました。



ひめゆり学徒隊について学ぶ平和大使（ひめゆり平和祈念資料館）



展示された読谷村の戦争遺品を見る平和大使（ユンタンザミュージアム）

自分なりの平和

大府南中学校 鈴置 晋平

僕の祖父は父親を知りません。終戦後、捕虜となり、カザフスタンの収容所で亡くなったそうです。「いつか親父に線香を上げに行きたい」とお盆になると祖父が話してくれます。それが、僕が戦争について興味を持った理由です。

飛行機から見た沖縄の海は、あまりにも綺麗で、本当に僕の知っている戦争が起こった場所なのだろうかと思いました。その思いの中、沖縄平和祈念資料館で見た写真は、戦争の恐怖や悲惨さを、とてもリアルに伝えてくれました。資料館に展示された写真を見進めていくと、僕はだんだんとアメリカ兵が嫌いになっていきました。アメリカはなぜ日本にこんなことをしたのかという疑問が浮かんできたとき、ある一枚の写真を見つけました。それは、戦友の死を悲しんでいるアメリカ兵の写真でした。僕は、その写真を見たとき、アメリカ人も同じなんだと思いました。

戦争は、多くの人の命を奪います。そして、その数が多ければ多いほど未来に大きな悲しみと、傷を残していきます。こんな過ちを繰り返さないために、どんなことが大切なのか。それはお互いに、理解し合う努力が必要だと思いました。簡単に、相手を理解することはできませんが、歩み寄ることはできるはずです。例え、人種や国が違って、お互いにいろいろ工夫し、自分の考えを伝え合うことが平和につながると僕は思います。

今回、沖縄に行って、平和について、じっくり考える機会を与えて

もらったので、少しでも多くの人に、平和について考えてもらえるよう、僕が、今回見聞きしたことを伝え、話し合っていきたいです。



「平和の火」の前で説明を受ける平和大使（平和祈念公園）



世界遺産を見学する平和大使（座喜味城跡）

戦争が生むもの

愛知中学校 関戸 美舟

今回の沖縄派遣で、自分がどれほど恵まれているかを身に沁みて実感しました。

1945年、沖縄戦。赤ん坊から老人まで、たくさんの人の命が奪われました。それぞれの夢も生活も、人権すらも打ち砕かれたのです。では、たくさんの犠牲を出した戦争は一体何を生んだのでしょうか。

人は失敗をした後、後悔に学びを重ね、再度同じ過ちを繰り返さないようにします。それと同様に、戦争のおぞましい経験によって人々は「戦争をしてはいけない」ということを学びました。しかし、このことを学ぶための戦争というのは、あまりにも代償が大きすぎるのではないのでしょうか。

手足がもげた子供、取り残された老婆、青酸カリの入った牛乳を飲み干す軍民……平和祈念資料館に展示された、痛々しい記憶の数々です。私は、資料を見ただけで例えようのない戦慄を覚えました。当時の人々は身も心も蝕まれ、78年目となる今でもそのときの光景が思い出されるそうです。そんな恐怖に塗られた戦争でないと、戦争の脅威や平和の尊さが学べないのでしょうか。戦争を知らない世界であっても、平和な生活はできるはずです。争いというものは、勝敗関係なく両者に深い爪痕を残します。やはり「争いは何も生まない」のです。

だからこそ、私たちは昔の出来事から多くを学ぶべきです。世代が移り変わり、戦争体験者が少なくなっている今、被災者から直接当時

の話聞く機会が減り、貴重になっています。そのため、今私たちにできることは、沖縄に行ってみること、生存者の実体験を聞いたり資料を読んだりすることに加え、学んだ内容や意見を発表し、戦争の恐ろしさを後世に語り継ぐ努力をすること。それは、私たち現代人の義務といえるのではないのでしょうか。



アメリカ軍が上陸したときの様子について説明を受ける平和大使



平和ディスカッションの様子（読谷村文化センター）

平和都市宣言文

緑香るにぎわいの中、子どもたちの笑い声が響き、汗流し働く若者の姿や地域で活躍する元気な高齢者の姿が目映るまち、健康都市おおぶ。大府市は、戦争のない平和な社会のもと、健康都市づくりに取り組み、着実な歩みを続けています。

世界の恒久平和は、人類共通の願いであり、日本国憲法の普遍の原理です。しかし、今なお世界各地で、核兵器の保有、テロ行為、武力紛争などの平和を脅かす様々な問題が起きています。

先人から引き継いだかけがえのない平和のバトンを守り、次の世代の子どもたちにしっかりと渡していくことは、今を生きる私たちの果たさなければならない重大な責務です。私たち大府市民は、一人ひとりの命を大切に、核兵器、テロ行為などの脅威のない平和な社会の実現を強く訴えます。

日本国憲法の公布から70年目の節目の年に、恒久平和とあらゆる争いのない社会の実現を願い、ここに「平和都市」を宣言します。

平成28年9月27日 大府市



「平和都市宣言」石碑（平成29年9月1日設置）